

## 広島市立安佐市民病院を受診された患者様へ

当院では下記の臨床研究を実施しております。

本研究の対象者に該当する可能性のある方で、診療情報を研究目的に利用されることを希望されない場合は、下記の問い合わせ先にお問い合わせください

研究課題名	大腸 T1 癌に対する内視鏡診断の現状と治療成績
研究責任者 (所属科名)	永田信二 (消化器内科)
本研究の目的・意義	<p>大腸 SM 癌は 10%程度転移することから、SM 高度浸潤癌 (T1b) を適切に除外診断し内視鏡治療を選択することはきわめて重要である。大腸腫瘍に対する内視鏡診断は、pit pattern 診断、NBI 診断による質的・量的診断の有用性は数多く報告されているが、NBI 拡大内視鏡所見の統一分類である JNET 分類が提唱されて以降、JNET 分類を用いた大腸腫瘍の治療方針につながる確立した診断ストラテジーはない。そこで、今回、当院で内視鏡的または外科的に切除された大腸早期癌を用いて、NBI 拡大内視鏡診断 (JNET 分類) と pit pattern 診断の深達度診断能について検討する。また、大きさに関わらず一括摘除が可能な ESD の発達により cT1b 癌に対する total biopsy の有用性も報告されているが、詳細な病理学的評価を行ううえで垂直断端陰性で切除することが大前提となるため、ESD で不完全切除となるリスク因子を解明することは重要である。また、大腸癌研究会のプロジェクト研究で、浸潤度以外のリンパ節転移危険因子がない場合はリンパ節転移率が 1%程度であるという結果が得られ、このデータを元に内視鏡治療の適応拡大も議論されている。しかしながら、T1b 癌に対する内視鏡治療単独症例の長期予後データが十分ではない現状では慎重に対応すべきであるという意見もある。そこで今回、大腸 T1 癌に対する ESD の治療成績から垂直断端陽性となる因子について検討し、当院で診断された T1 癌の予後を調査することで、T1 癌における ESD の有用性について検証する。</p>
調査方法・研究期間	<p>後ろ向き観察研究 データ収集期間：下記参照 研究期間：2018 年 5 月までを予定。</p>
該当資料・データ	<p>★対象となる患者様 検討 1) 2008 年 1 月から 2017 年 1 月までに本院で NBI 拡大観察と pit</p>

	<p>pattern 拡大観察を施行後、内視鏡的または外科的に切除された早期大腸癌の方。</p> <p>検討 2) 2017 年 9 月までに本院で大腸 ESD を施行した pT1 癌の方。</p> <p>検討 3) 1994 年 11 月から 2017 年 5 月までに本院で内視鏡的または外科的に切除された pT1 癌の方。</p> <p>★利用する情報</p> <p>電子カルテに記載のある診療記録、検査データを利用します。</p>
個人情報の取り扱い	<p>利用する情報から氏名や住所等の患者さまを直接特定できる個人情報は削除致します。また、研究成果は学会等で発表を予定していますが、その際も患者さまを特定できる個人情報は利用しません。</p>
共同研究機関	なし
本研究の資金源 (利益相反)	本研究に関連し開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。
お問い合わせ先	<p>電話：082-257-5211</p> <p>担当者：嶋田 賢次郎（内視鏡内科 副部長）</p>
備考	